

国立がん研究センター

子どもたちに未来への選択肢を届けて
「がんに負けない国へ。」

国立がん研究センター
中央病院
小児腫瘍科 医長
荒川 歩先生

国立がん研究センターは1962年の開設以来、約60年にわたり日本のがん対策を牽引し、がん研究・がん医療をリードし続けている。そのなかでも小児がんの治療に取り組む同センター小児腫瘍科の荒川歩先生に聞いた。

小 さな体で、がんに立ち向かう子どもたちがいる。

しかし小児がんは大人に比べて薬や治療法も限られている。「欧米では小児がんに使われている薬が日本では使えないことも多く、薬が使えないために子どもが命を落としてしまう——こんなケースも起きています。海外で使える薬が日本で使えるようになるまで長い時間のかかる「ドラッグ・ラグ」の解消は急務です」。国立がん研究センターの荒川歩先生は、日本における小児がん治療の現状をこう話す。

国立がん研究センター中央病院小児腫瘍科は小児がんのなかでも特に希少で、症例数の少ない種類のがんや、治療選択肢の少ない再発固形がんの治療に携わるほか、新しい薬や治療法の開発も行っている。

「近年小児がんのうち約7〜8割は治るようになってきています。しかし、残りの2割の再発・難治の小児がんには既存の抗がん剤が効きにくく、有効な治療薬が切望されています。また、治療後の子どもたちの生活や将来への影響を最小限に止めるため、より副作用の少ない薬が必要で、ただ小児がんは対象患者が少ないため、新規薬剤開発が困難。大人のがん治療では遺伝子変異を狙い撃ちする分子標的薬など新たな薬が生まれていますが、日本では小児がんに対して使うことの出来る新しい薬の数はまだまだ少ないのです」

**がんと闘う子どもたちへ
一つでも多く新しい薬を**

ドラッグ・ラグの解消に向けて国立がん研究センター中央病院では、小児がん治療薬の国際共同治験に日本も参加するための体制整備や、小児がんの患者が必要とする薬を迅速に使える

ようにすべく、患者申出療養制度を利用した適応外薬・未承認薬の臨床試験などを進めている。「薬の効果や副作用のデータを研究として収集する事で、将来保険適用を検討する際の材料にできればと考えています。がんと闘う子どもたちに、一つでも多くの治療の選択肢を届けたい」と荒川先生は話す。

子どもたちのがん研究の成果を届けていくには、資金面での裏付けが欠かせない。がん医療の明日を開くために、一人ひとりの寄付が力になる。

お問い合わせ



国立がん研究センター基金
The National Cancer Center Foundation

国立がん研究センター 寄付募集担当

☎03-3547-5333

メール: ncckifu@ncc.go.jp

国立がん研究センター東病院 事務部寄付担当

☎04-7133-1111 (内線91460)

メール: kifu@east.ncc.go.jp

